【査読論文】

門弟による中江藤樹の孝思想の継承と発展

― 熊沢蕃山と淵岡山を中心に ―

董　航

はじめに

儒教の世界における「孝」というと、親によく仕えることが想起される。それは、「孝」の文字の成り立ちからもうかがえる。「孝」の字は、「老」の省略体と「子」の組み合わせからなる会意文字であり、「子」が「老」を助け支えることを表している。さらに具体的にいえば、「孝」とは生前の親への敬愛孝行と、死後の親への追慕祭祀をすることである。このことに関して、『孝経』喪親章第十八においても、「生事愛敬。死事哀戚。生民之本盡矣。死生之儀備矣。孝子之事親終矣。（春秋に祭祀して、時を以て之を思ふ。生けば事へて愛敬し、死せば事へて哀戚す。生民の本、尽くせり、死生の義、備はれり、孝子の親に事ふること終はれり。）」と述べられている。

しかし、日本陽明学の祖と呼ばれる中江藤樹（一六〇八～一六四八）にとって、「孝」はそれだけにとどまらず、「孝行」、「孝徳」、「明徳」、「至徳」、「皇上帝」、「良知」、「仏性」、「太虚」、「神明」と一体化した極めて独自なものであった。そこには『孝経』の受容や、近親者の死を若い頃から相つぎ体験したという内面的な影響と、その後の学問的な進展などが相互に関係したことはいうまでもない。藤樹は一生涯を通して「孝」の崇拝と実践を行った。彼にとって、「孝」は宇宙のあらゆる万物を貫く広大無辺な至徳であり、世界に遍在する根本原理だったのである。このような「孝」に代表される藤樹の思想は近世思想研究において極めて重要な位置を占めている。

では、藤樹の孝思想が後世に及ぼす影響をはかり知るにはどうしたらよいか。すなわち、藤樹の孝思想そのものの継承はいかなるものであろうか。このことはまだ十分に明らかにされたとはいえない。なぜならば、後世の人々が藤樹の孝思想の書物を読んだとしても、個々人の理解という主観的な要素や、社会的性差などの困難な障壁が存在するため、その真髄を必ずしも理解できているとは限らないからである。

そこで、本稿では、まず藤樹の直弟子で「藤樹門下の双璧」と称される熊沢蕃山（一六一九～一六九一）と淵岡山（一六一七～一六

八六）による孝思想の受け継がれ方や発展させ方を中心に分析を行い、直弟子の思想から、藤樹の孝思想を考察したいと考えた次第である。

一、中江藤樹の孝思想

中江藤樹は、慶長一三（一六〇八）年に近江国高島郡小川村（現在の滋賀県高島市）に生まれ、慶安元（一六四八）年に没した。平和な江戸前期において、権力者はその支配体制を支える合理的なイデオロギーを必要としていた。一方で、生活者も現世的・社会的・人間的な諸価値を日常生活のなかに求めるようになった。

こうした時代背景のもとで、藤樹は九歳の時、伯耆国米子藩の加藤貞泰（一五八〇～一六二三）に仕える祖父の養子となり、「十三経」(1)などを習いはじめた。その後、一四歳で祖母を、一五歳で祖父を、一八歳で実父を亡くすなど、近親者の死に相つぎ遭遇した。二七歳になって母への孝養などを理由に帰郷を願い出たが、許されないまま脱藩致仕した。四一歳で死去するまでの小川村の在村時代において、藤樹は母に孝行を尽くしながら勉学に励み、私塾を開いて門弟や近隣の人々に良知心学を講じ続けた。その数多くの徴行や感化によって、没後に「近江聖人」と称えられている。また、彼が死去した約四〇年後に、藤井懶斎（一六二八～一七〇九）著『本朝孝子伝』が刊行され、その「今世部」に「中江藤樹」の条目が収録されている。「淡海吹起。陸王儒風。豈翅善身。誨人有忠。為母顫禄。旋郷色愉。于嗟篤孝。性乎学乎」(2)とあるように、懶斎から厚く賞賛されている。

藤樹は「孝」を提唱する者であるだけでなく、「孝」の実践を重んじ、善行徴化に努める典型的な躬行者でもあった。彼は、三二歳から本格的に『孝経』を受容し、孝思想を『翁問答』で発展させ、『孝経啓蒙』で結実させた。後に、三六～三七歳の時、女訓書『鑑草』を著した。『翁問答』は天君という老師と、体充という弟子との問答を藤樹が傍聴して記録したものであり、いわゆる仮託の形式の著書である。その主題は孝思想に関する論述、俗儒と異端に対する批判である。『孝経啓蒙』では、藤樹は儒教徒として「孝」を超越的皇上帝と結合し、徹底的に信奉した。彼は、敬虔な立ち振る舞いをもって『孝経』を毎朝、拝誦していた。この頃の藤樹の「孝」は、朝夕親に仕えるものだけではなくなり、天命・天則など普遍的理念という高次元の概念へと昇華され、体系化されはじめた。下程勇吉は、藤樹の求道一筋の途がつねに実践的体認と古典の心読との統合によって貫かれており、そこに「孝」「明徴」「良知」の哲学や福善禍淫の形而上学が成立していると指摘する。これらの心法の学が相互連関をなして藤樹精神の花を開いたものが『翁問答』であるという(3)。実際に、その後の『孝経啓蒙』は、藤樹が死去するまで何度も修正を加えて完成した著述であり、藤樹の晩年の「孝」についての解釈を探求する上において重要な文献である。確かに、彼の孝思想は、『翁問答』と『孝経啓蒙』のなかにその全容がうかが

われる。しかしながら、大著といわれる『翁問答』と『孝経啓蒙』に限らず、後の『鑑草』にまで孝思想が一貫していたことは、すでに別稿によって明らかにしている(4)。同書は一見、中国善書『廸吉録』などを抄訳した女性向けの教訓書ではあるものの、徳目から説話に至るまで、すべて孝思想を主軸に据えていたのである。

二、熊沢蕃山の場合

藤樹の思想を最もよく表しているのは、その弟子熊沢蕃山の生き方であるといわれる(5)。蕃山の人柄・思想などの研究は、従来から盛んに行われてきた。その思想体系について、尾藤正英は、普遍的な人道に関わる理念を出発点とし、批判的視点から現実社会の健全化・合理化を追求したものであると指摘している(6)。池田仁子は蕃山の女子教育論とその影響を考察の上、彼の女子教育思想の根底にあるものが人道であるとする。また、自己修練志向と中国文化直輸入的性格を持つ藤樹の『鑑草』に比して、蕃山の『女子訓』は社会改善志向と古来の日本の中国文化消化的性格を持つとしている(7)。近年、さらに吉田俊純は、蕃山の波乱の生涯をたどり、宗教的非合理主義を中心に据える思想を整理し、荻生徂徠や水戸学などへの影響を明らかにした(8)。これもまた蕃山研究に新しい展開をもたらすこととなった。

二―一、蕃山の入門と師弟間の交わり

蕃山は一六歳で備前国岡山藩主池田光政（一六〇九～一六八二）の児小姓役として出仕し、光政への思想的影響力が大きい人物として知られる(9)。蕃山は朱子学の勉学に励んでいたが、独学では満足できず、師を探しはじめた。そのときに、旅の途中で同宿した飛脚から、村人に人間としての道を説く藤樹の高名を聞いた。彼は、藤樹を二回訪ねて、二三歳のときに弟子入りを許可された。その年の九月から翌年三月まで藤樹のもとで『孝経』『大学』『中庸』など儒教の基本的な古典を学んだ。

蕃山が二四歳で帰省する際に、藤樹は彼に次のような文章を送った。「今吾れ熊沢子に於て性命を以て相友愛する者に似たり。是を以て愚孤ならざるの徳無しと雖も、往年辛巳の秋、謬って有隣の訪に与り、而して其の相識る所以の由を推すに、同声相応じ、同気相求むるの機有り。人ならんや天なり。故に講習討論、心心相通融して、而して甚だ輔仁の益・莫逆の寄趣を得るを喜ぶ」(10)という。藤樹は、蕃山との「同声相応、同気相求」という「相識」を運命的なものとして心に深く感じていた。自らよりひと回りほど若い蕃山だが、この弟子のことを「輔仁の友」「莫逆の友」として受け止めた。

また、「送熊沢子　壬午之夏」という詩文もある。「淵く鑑みれば惟れ幸なり　動にして動なく静にして静なし　倚ることなく円神は未発の中なり　独りを慎むの玄機は必ず是においてす　上天の載は自ら融通す」(11)とある。このようなことから、藤樹が弟子の蕃山に、どれほど儒者としての大成を期待していたかは、想像に難くない。

二―二、蕃山に見る孝思想の引継ぎ

蕃山は、藤樹のように「孝」を神格化しなかったが、「明徳」、「良知」、「太虚」と同一の概念としての「孝」に畏敬を示し、「全孝の心法」を極めて大事にしていた(12)。「道」、「誠」、「中和」、「慎独」、「良知」、「孝」、「天理」などの理解については、『伝習録』や藤樹、蕃山の諸書において一致した見解に接する(13)と指摘されている。実際のところ、蕃山思想にはとりわけ「孝」を重んじる傾向が見られる。

『集義和書』は蕃山の経世論、いわば彼の政治への関心の基本的な立場に関する学説を集大成したものである。同書には、「孝は天地未画の前にあり、太虚の神道なり。天地人万物みな孝より生ぜり。春夏秋冬、風雷雨露、孝にあらざるはなし」(14)という一節がある。ここでいう「孝は天地未画の前にあり、太虚の神道なり。天地人万物みな孝より生ぜり」(15)という語句は、そのまま藤樹の『孝経心法』にある言葉を援引している。孫路易の指摘(16)にもあったように、蕃山において「孝」は、太虚の神道と同一であり、天・地・人・万物の根源を成す本体である。

また、「孝経に深からざる故に、うたがひ出来候」とあるように、蕃山の『孝経』を尊崇する点も、藤樹の考えの受け継ぎであるといえよう。さらに、「孝経の心法は、正心修身、天命の分を安じて、人々処所の位に随て、道を行なり。天の、人を生ずること、物あれば則あり。天子の富貴にはをのづから天子の則あり。公・侯・伯・子・男、をのをの則あり。卿・大夫・士、其道あり。農・工・商、其務あり。其行ふ所の大小は各別なれども、孝の心法はかはりなし」(17)という一節がある。『孝経』の心法は、心を正し、身を修め、天命の分を安じて、時・処・位に応じて道を行うことである。すなわち、人間はそれぞれ職分が相異なるものの、「孝」の心法の本質には変わりないという。ここには、蕃山思想の根底にある「時・処・位」論が見てとれる。「時・処・位」論は、藤樹にはじまり蕃山において本格的に説かれる儒教の教えの一つである。蕃山は、時(時代・時期)、処(地域・場所)、位(社会的地位・身分)によって人間の心の本質は変わらないものの、人情時変に応じて、柔軟に心を働かせて判断したり部分的には修正して受け入れたりするべきであると説いている。

藤樹は『大学解』において、「天子・諸侯・卿大夫・士・庶人五等ノ位尊卑大小差別アリトイヘドモ、其身ニ於テハ毫髪モ差別ナシ。(中略)天下ノ万事ハ皆末ナリ。明徳ハ其大本ナリ」(18)と述べている。人間には天子・諸侯・卿大夫・士・庶民といった身分の差があるものの、人間としては何ら差異はない。すべての人々は、身分に関係なく明徳を大本として最善の道を行わなければならず、こういった道徳の根源がほかでもなく「孝」である。身分・出自・社会的な地位を異にする人々にも平等性があるという点は、師弟間の継承が見られる。つまり、心を働かせて道徳規範を実践していけば、人

間はだれでも『孝経』の心法、すなわち万物一体、天地太虚との合一の境地へと導かれていくのである。

さらに、藤樹は「全孝の心法、（中略）約ところの本実は身を立て道を行にあり。身を立て道をおこなふ本は明徳にあり、明徳を明らかにするもとは良知を鏡として独を慎にあり」(19)とも述べている。「全孝の心法」は立身・行道にあり、立身・行道のもとは明徳、明徳のもとは良知を鏡として慎独に努めることであるという。対して、蕃山も「現実的存在の秩序・道理を主題化する方向」(20)において、「明徳を養ひて日々に明かにし、人欲の為に害せられざるを心法といふ。是れ又心法の実義なり」(21)、「慎独の工夫は誠意なり。自欺ことなきものは独を慎にあらずや」(22)とする。これらの記述からわかるように、藤樹も蕃山も現実の日常生活のなかの明徳や、自己欺瞞しないことを強調しているのである。

最後に、次節で検討する淵岡山の『鑑草』に対する態度と対照する形で、蕃山の著した『女子訓』にも触れておく。同書は、上・下に分かれており、上では介婦と女師の問答形式に託して女性がどのような教養を身につけるべきかを説き示している。下も問答形式を一貫させるが、仏教の修行に関する説明が大半を占めている。上の冒頭において、「婦人あり問て云、鏡草を見侍れば、女は嫉妬なきを賢なりとすと見え侍り。まことにしつとの心より家もさはがしく不仁の事有て、子孫の災のたねとなりしためし高麗唐倭国ともに多く侍ればつゝしむべき事の第一也」(23)という問いと、「鏡草は女の為にあらはせる書なれば、女のよきのみをあげて夫をえらばず、作者の得かたにはあらざれども、得かたにとりあつかふ男あれば、婦人のとがめもことはりにて侍り」(24)という答えが挙げられている。すなわち、『鑑草』は、男性に言及せず、女性のために書かれたものであり、女性教化のための方便の作品であると同書を位置づけている(25)。また、日本教育文庫本の『女子訓』の序において、「如二藤樹先師鑑草之作一、則以二怪異之事迹胡談之仏性一、雑二説於孝悌明徳一、是乃世風未レ識二聖学一、婦女啻熟二仏語一泥二奇迹一」と巨子瑛が述べている(26)。ここからも蕃山による藤樹先師の著作『鑑草』への厳しい意見がうかがわれる。

藤樹の門下を出た後、蕃山は藤樹学を離れて自らの考えをまとめ、やがて蕃山思想として一家を成していったことは周知の事実である。正保二（一六四五）年、蕃山は再び光政につかえ、政治的・学問的手腕を発揮した。治水・治山による農業政策の実践、藩民への儒教の普及から軍事面の充実、貿易の振興、岡山藩の財政健全化に大きく寄与した。この時期の蕃山の思想に関しては、音楽・易学・神道・環境倫理学などの側面から優れた先行研究の成果が見られる(27)。しかし、本稿の分析により、彼の孝思想は、中江藤樹に胚胎したその形而上的継承・展開であったことが明らかになった。

三、淵岡山の場合

一方、熊沢蕃山とともに「藤樹高弟二山」とならび称される淵岡

山は、藤樹学の正統の後継者として名を成した学者である。だが、残念ながら、これまでの岡山をめぐる研究は蕃山ほど数多くはなかった。

戦前、高瀬武次郎「〈叢説〉隠れたる陽明学者：淵岡山先生」(28)と柴田甚五郎「藤樹学者淵岡山と其学派」(29)に代表されるように、岡山に関する基礎研究が行われ、岡山の家譜およびその学説、門人による継承などが整理された。しかし、それ以降、岡山の思想研究はほとんど行われなかった。近年になり、この局面は木村光徳『日本陽明学派の研究：藤樹学派の思想とその資料』(30)によって打開された。最近では、淵岡山とその門弟・後学の文献は、吉田公平ら編『中江藤樹心学派全集』(31)においてまとめて刊行されるに至った。高橋恭寛「会津藤樹学派の展開と〈藤樹の教え〉」(32)「淵岡山における『藤樹学』の展開」(33)などの成果も徐々に増えてきたところである。

三―一、岡山の入門と師弟間の交わり

岡山は元和三（一六一七）年仙台に生まれ、父が奥州仙台伊達家の家臣である。父の知人の推薦で旗本・茶人の一尾伊織（一五九九～一六八九）に近習として仕え、文武の道のみならず、神道・音楽・茶道なども修養した。正保元（一六四四）年、岡山は伊織の知行地である近江国蒲生郡への年貢の取立使者として、江戸と近江を往復しはじめた。そのうちに藤樹の学徳を聞くようになり、同年の冬、中川謙叔（一六二四～一六五八）の紹介で入門した。

そのときの状況について、「藤樹先生年譜」(34)には、「冬淵岡山始来謁。退室而語人曰。先生非独徳容可敬。聡明才智、亦有不可企及者。先生聞之。嘆曰。吾常恐以聡明才智加人。務韜蔵之。猶不免有時発露。彼之所以美吾者。即吾之所以自恥也」(35)と記されている。岡山は入門して日がまだ浅い頃、藤樹の徳行だけが敬われるべきものではなく、その聡明才智に企んでも及ばないものがあると述べて、藤樹の英気を看破して高く評価したのである。対して、藤樹は、常に聡明才智を発露せざるよう自分の振る舞いに気をつけている。しかし、岡山から賛美された以上、やはり注意を怠ったのだと自分の態度・行為などを反省した。このことからも岡山が優れた炯眼の持ち主であったことがわかる。師弟の間でこのような意気投合、教学相長の場面が続く日々のなか、岡山は藤樹から教化、さらに精神的な感化を受けていったのである。

岡山は藤樹が亡くなるまで五年間ほど師事していた。藤樹が臨終時に、岡山は江戸にいた。後で先師の遺言を聞き、藤樹の遺志の継承を使命として、それを実現しようと決心した。このことについて、藤樹の補伝では「先師の道我一代に不成ば二代になりとも三代になりとも五十年百年の後になりとも興起し、天下家ごとに和順になる様に所希也。是先師の志願なれば也」(36)と記載されている。事実、藤樹の没後、岡山は京都へ行き、三二歳の頃から死去までの約四〇年間、藤樹の学問を講じ続けた。延宝二（一六七四）年には、京都

西陣葭屋町に藤樹祠堂を建て、先師の霊を祀った。そのときの祝文には、「千秋万歳是時屯。孝徳一貫天地人。（中略）先師之徳化、討習講論、徳輔仁益、以立有必登聖域之志、全脱却凡情而精義入神而已」(37)とある。岡山がどれだけ藤樹の学説を篤信し、その孝徳を讃嘆し、師を思慕したのかがよくうかがわれる。藤樹祠堂の設立と同時に、岡山は同志とともに京都一条付近の藤樹の遺跡において家塾も開いた。以後は広く門戸を開き、弟子を集め、藤樹心学を日本全土に伝え広めることに身を投じた。

三―二、岡山に見る孝思想の引継ぎ

ここでは、京都時代の岡山による藤樹学、とりわけ孝思想の保持・継承のあり方を考察する。結論を先に述べると、岡山は藤樹のような境地にまでは至らなかったが、「孝」の理解と方法論に対してはその大筋を踏襲している。

『藤樹心学派全集』の「岡山先生示教録」には、次の記載がある。「藤樹の主意は如何」と問われた時に、岡山は「藤樹の学の手段色々有之候得共、其内明かを主意とめされ候と可申候。明かと言事申しつくしかたし云々」(38)と答えた。ここでいう「明か」はいうまでもなく、藤樹の主張、すなわち「明徳」、「良知」、「仏性」、「本心」を明らかにするということである。

そのほかにも、「神道仏道今時の儒者軍者詩人歌人此外諸子百家芸にて身を立る者必己が所レ作ス を以テ第一等人間第一義治国平天下之義也と罵(ののしり)申事尋常ニ候。（中略）儒者博学多才天地の他までも理達し其功勝て云へからず。（中略）是等は皆聖教の域に不レ合といふ事あるへからず」(39)、「三教共明徳を明にする教なれ共」(40)と記載されている。つまり、岡山は儒・仏・道三教の相違や対峙よりも、凡情を脱し天理にあわせて明徳を明らかにすることに三教の共通点を見出して後学に伝えたのである。これはまさしく岡山が藤樹の死去まで身近で師事していたからこそ、宗教的ともいえる孝思想を主本とする藤樹の心学の真髄を体認し、師の心伝を受けることができた証しにほかならない。

さらに、「鏡草、翁問答、春風之類、御読被成候はば、俗心除可申候」(41)とあるように、岡山はこれらの著作を読んで実践すれば俗心を除き本心を明らかにすることができると述べている。すなわち、岡山にとって、これらの著作はみな、同じ種類のものであって、その根底には、藤樹の一貫した孝思想（本心）を明らかにすることこそが一大事であるという考えがあった。『鑑草』は、漢字仮名交じりの和文体で綴られたとはいえ、女性のためだけに書かれたものではない。実際のところ、藤田覚は、『鑑草』を読んだのは、多くは男性だったと簡明直截に指摘している(42)。『鑑草』で本心を明らかにする場合、男女の区別はそれほど重要な意味を持たない。このことは、藤樹の薫陶を直々に受けた岡山が、見事にその教えを体得したことを示している。

また、岡山自身も『孝経』を講じ、門弟一同もそれを読誦・討論・

学習していた。晩年、仙台に墓参りに帰省したときも、両親の神霊を拝し、孝道を自ら実践していた。岡山が藤樹の感化を受けて孝道を尊重したと同様に、岡山の門弟もまた岡山の感化を受けて孝道を尊重した。「孝」の教説者・躬行者である岡山に感化された門弟は、会津、近江、伊勢、江戸、熊本、岡山など日本各地からその門下に集まるに至った。会津喜多方の歴史編纂委員会によると、北方（喜多方）地方で藤樹学の研究や講座に使用されていた書目録には、藤樹の『孝経啓蒙』『翁問答』『鑑草』のみならず、岡山の門人が編纂した『岡先生華翰』『岡山先生示教録』『会津藤樹学道統伝』などもあった。北方の藤樹学徒につながる学風は、淵岡山のそれであるが、岡山の根本思想は、藤樹のいう「天（神）」、「孝」、「良知」の概念を継承するものであった(43)。つまり、会津の藤樹学は、藤樹と岡山を尊崇し、その学徳を中心として、人間としての道を修養しようとしたものであった。

以上のように、傑出した才覚と遠大な計略に燃えて、公家や大名も門下に集め、華々しく活躍した蕃山に比べると、岡山は一貫して庶民の教育を実践したといえる。彼は藤樹なき後、藤樹学の最大の拠点を築き、俗世間の名声や利益などに囚われず、心にわだかまるところがなく、ひたすら講学生活を静かに送り続けた。新説を立てず、著述も撰せず、ただ専心一意に藤樹学を伝え広める一生を送った。師である藤樹自身も、大洲藩の在藩時代における郡奉行としての仕途を閉ざし、小川村の在野時代における村落教師(44)としての人生を送っており、その生き様に倣ったからである。この意味でも、まさしく藤樹学の本流は岡山によって伝えられていったといえよう。

四、「藤樹心学」という呼称の由来

ところで、従来の研究では、藤樹の学問・思想を藤樹学または藤樹心学、良知心学と呼ぶことが多かったが、本稿でも藤樹学という呼び方を多く用いている。その由来は何だろうか。実は、それを藤樹心学と呼んで成立させたことは、岡山の藤樹学に関する講学にまで遡ることができる。藤樹自身も自らの学問のなかで、心学を極めて特異な地位にして扱っている。

例えば、『翁問答』には、「聖賢四書五経の心をかがみとして、我心をただしくするは、始終ことごとく心のうえの学なれば心学とも云なり。この心学をよくつとめぬれば、平人より聖人のくらいに至るものにて候ゆえに、また聖学とも云なり」(45)と記載される。藤樹は、心学を心上の工夫を強調する「心のうえの学」として、聖学と同一視している。また、「道といへるも和といへるもみな仁義の徳のことなり。儒門の心学の外に此徳をあきらかにすべき道なければ、心学をつとめその徳をあきらかにしてのちに、軍法をまなびたるがよしと云事分明なり」ともある。ここでは、文武両道を目標に掲げるという当時の武士の理想像が示されている。すなわち、儒教の心学をもって「仁義の徳」を明らかにしてから軍法を学ぶべきで

あるとする。すでに知られていることだが、藤樹学は心を重視しており、「心学をつとめその徳をあきらかにして」、正しい道を行うことを肝要とする。このことは、『鑑草』において中国善書を利用する際にも一貫して述べられている。

時代がさらに下っていくと、山鹿素行（一六二二～一六八五）と伊藤東涯（一六二七～一七〇五）も陽明学を「心学」と呼ぶことが確認できる。太宰春台（一六八〇～一七四七）と山県周南（一六八七～一七五二）は朱子学を「心学」と呼ぶ。それらと区別するためか、石田梅岩が創唱した教学は、石門心学として次第に広まり、近世思想史上に特異の地位を占めるに至ったのである(46)。

石門心学は、梅岩の後継者である手島堵庵（一七一八～一七八六）によって心学という呼び名を付けられ、「孝行」、「和合」、「勤勉」、「倹約」、「正直」など人間の本性につながる実践倫理を強調し、武士、農民、町人それぞれの社会的役割と生活体験に即して、儒・仏・道三教ないし神道的教養を平易に解釈することが特徴である。日本近世教育史、とくに石門心学を研究した石川謙によれば、心学という名称は「江戸時代の思想界に異常な魅力を以て寵児」とされ、「学は畢竟心学であらねばならぬという信念も亦、名称も普及とともに普及していた」(47)という。肖琨は、「善書は（中略）民衆のエネルギーをより具体的な実践へと導き、善書思想の影響力は、神儒仏の宗教の枠組みに限定されず、上から江戸社会全体に浸透して、江戸後期に至って、急速に教勢が広がる石門心学などと結びつき、近世民衆の『自我』形成に強い関心をもつ思想として底層からフィードバックしていたものといえよう」(48)と述べる。つまり、石門心学の成立には、藤樹心学の影響が深く関与していたということである。さらにいえば、石門心学は藤樹心学に影響を受けて成立し、さらにその思想的な源由を成すものには中国善書思想の働きかけがあったと捉えることができる。この石門心学と善書思想の関わりについては別稿にて検討したい。

おわりに

以上のように、蕃山、岡山は等しく藤樹に師事する者であったが、性格も境遇も異なり、先師の学問を応用する方法も同様ではなかった。蕃山を敬慕した山田方谷（一八〇五～一八七七、幕末期の儒者、備中松山藩の陽明学者）は、蕃山思想の本質を、太虚の道体に根拠をおき万物一体観を介して経世済民へと展開していく点に求めている(49)。相良亨も、蕃山は朱子学の研究を通して、藤樹の思想を止揚し独自の思想を示していると述べている。氏は、蕃山を武門出身の儒教者・経世家と位置づけて、彼の政治的な才能を強調する(50)。一方、北方の藤樹学の祖と呼ばれる矢部惣四郎（生年不詳～一六七七）は岡山に学び、帰郷後に前三子といわれた五十嵐養庵（生年不詳～一七〇八）・遠藤謙安（生年不詳～一七一二）・東條方秀（生年不詳～一六九六）らに藤樹学を伝えた。この後に三人も、自ら京都に上り、岡山に藤樹学の直伝を受けた。帰郷後に、三人は、子弟朋

友を集め、地域の農民・商人・男女の差別なく教え導き、藤樹学の普及に力を尽くした。この会津における藤樹心学の継承に象徴されるように、藤樹の学問は、岡山とその門人たちの唱道により、その後も途切れることなく脈々と受け継がれていたものであった。

結果的には、近江の小川村で始まった藤樹の心学は、その門下に熊沢蕃山・淵岡山の竜虎が登場することによって、当時を代表する名君の政治に実を結び、全国規模で良知心学を信奉する俊秀の輩出につながるに至った。藤樹思想の主本をなす「孝」は高弟の熊沢蕃山、淵岡山だけでなく、彼らの思想に傾倒しその門下に入った後学にも脈々として受け継がれて、後世の日本人の心を育てるものになった。

日清戦争後、初代中華民国臨時大総統の孫文（一八六六～一九二五）や初代中華民国教育総長・北京大学総長の蔡元培（一八六八～一九四〇）など清末民初期中国の革命家たちに日本の陽明学が逆輸入されたほど、その影響は日増しに拡大していった。では、中国本土において脈々と伝えられ続けた陽明学と、藤樹やその門弟によって成立・展開されてきた日本の陽明学とはどういったつながりがあるのだろうか。この問題は、近世・近代移行期の政治思想史の視点抜きには語れないもう一つ興味深い課題であるため、今後の課題としたい。

〔後記〕本稿は、日本比較文化学会中国・四国支部研究集会（二〇二一年八月八日）における口頭発表を基に大幅に加筆・修正した上でまとめたものである。発表にあたりご指摘くださった先生方と、資料調査にあたりご協力いただいた広島大学大学院人間社会科学研究科教育科学専攻の毛月氏に深謝申し上げる次第である。

【注記】

（1）中国における儒教の一三種の基本的な古典の総称であり、宋代に定められた。具体的には、『周易（易経）』『毛詩（詩経）』『尚書（書経）』『周礼』『儀礼』『礼記』『春秋左氏伝』『春秋公羊伝』『春秋穀梁伝』『論語』『孝経』『爾雅』『孟子』がある。

（2）『本朝孝子伝』国書データベース、和古書請求記号はヤ1―126―1～3。

（3）下程勇吉『中江藤樹の人間学的研究』（広池学園出版部、一九九四年）三三頁。

（4）拙稿「中江藤樹の女子教育思想：『翁問答』と『鑑草』との一貫性を中心に」台湾輔仁大学日本語日本文学編輯委員会『日本語日本文学』四七、二〇一八年）四一～六一頁。

（5）林秀一「岡山における藤樹学と蕃山学」（岩波書店『日本思想大系月報』第三〇巻、一九七一年）三～六頁。

（6）尾藤正英「熊沢蕃山の歴史的位置　上」（岩波書店『思想』四三〇、一九六〇年）、同「熊沢蕃山の歴史的位置　下」（岩波書店『思想』

四三三、一九六〇年）。

（7）池田仁子「熊沢蕃山の『女子訓』について」（日本歴史学会『日本歴史』四七六、一九八八年）八八～一〇四頁。同「熊沢蕃山の女性観」（日本思想史懇話会『季刊日本思想史』三八、一九九二年）六九～八五頁。

（8）吉田俊純『熊沢蕃山―その生涯と思想―』（吉川弘文館、二〇二〇年）。

（9）以下、蕃山の出自に関しては、後藤陽一「熊沢蕃山の生涯と思想の形成」（後藤陽一、友枝龍太郎『日本思想大系３０　熊沢蕃山』岩波書店、一九七一年、所収）を参照している。

（10）藤樹神社創立協賛会編『藤樹先生全集』第一冊・送熊沢子　壬午之夏（藤樹書院、一九二九年）九二～九三頁。原文は「今吾於熊沢子似以性命相友愛者。是以愚雖無不孤之徳。往年辛巳之秋。謬於有鄰之訪。而推其所以相識之由。有同聲相応同氣相求之機焉。人乎天也。故講習討論。心心相通融。而甚喜得輔仁之益莫逆之寄趣」。以下では、『藤樹先生全集』と略す。

（11）『藤樹先生全集』第一冊・送熊沢子　壬午之夏、九二～九三頁。原文は「淵鑑惟幸。動而無動靜而靜。無倚圓神未発中。慎獨玄機必於是。上天之載自融通」。

（12）中村泉「熊沢蕃山の『孝』の世界観と経世論」（関西大学史学・地理学会『史泉』七五、一九九二年）二三～三六頁。

（13）前田一良『日本近世思想史研究』（文一総合出版、一九八〇年）二〇五～二一五頁。

（14）熊沢蕃山著、正宗敦夫編『蕃山全集』第一冊・集義和書　巻第八（蕃山全集刊行会、一九四一～一九四三年）一八〇～一八二頁。以下では、『蕃山全集』と略す。

（15）藤樹書院編『藤樹先生全集』第二冊・孝経心法（岩波書店、一九四〇年）六一五頁。

（16）孫路易「熊沢蕃山の『孝』」（岡山大学大学院社会文化科学研究科『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』四〇、二〇一五年）一～一二頁。

（17）『蕃山全集』第一冊・集義和書　巻第八、一九一～一九二頁。

（18）『藤樹先生全集』第二冊・大学解、三七～三八頁。

（19）『藤樹先生全集』第三冊・翁問答、二六九頁。

（20）高橋文博「後の君子を俟つ熊沢蕃山　近世日本における陽明学の展開（2）」（就実大学大学院教育学研究科『就実大学大学院教育学研究科紀要』四、二〇一九年）二一～三六頁。

（21）『蕃山全集』第一冊・集義和書　巻第十三、三四一頁。

（22）『蕃山全集』第一冊・集義和書　巻第九、二二〇頁。

（23）『蕃山全集』第二冊・女子訓　上、三七一頁。

（24）『蕃山全集』第二冊・女子訓　上、三七四頁。

（25）拙稿「中江藤樹著『鑑草』の流通と影響―中国善書の媒介として―」（日本比較文化学会『比較文化研究』一五三、二〇二三年）一五～二六頁。

(26) 同文館編輯局編『日本教育文庫』女訓篇（同文館、一九一〇年）国立国会図書館デジタルコレクション、請求記号は３７０．８-Ｎ６８５-Ｄ。

(27) 例えば、佐久間正「岡山藩出仕期の熊沢蕃山の思想と行動」（日本思想史懇話会『季刊日本思想史』三八、一九九二年）八六～一〇五頁、関智子「蕃山・梅岩・昌益にみる日本型環境思想の原型：環境教育の基盤としての可能性」（日本環境教育学会『環境教育』二三（二）、二〇一三年）六七～七八頁などが挙げられる。

(28) 高瀬武次郎「〈叢説〉隠れたる陽明学者：淵岡山先生」（史学研究会『史林』二（二）、一九一七年）二一五～二四〇頁。

(29) 柴田甚五郎「藤樹学者淵岡山と其学派、事蹟の研究（昭和一五年一月例会報告）」（日本学士院『帝国学士院紀事』一（一）、一九四二年）九五～一二五頁、同「藤樹学者淵岡山と其学派：学説の研究（昭和一五年一月十二日報告）」（同『帝国学士院紀事』二（三）、一九四三年）三八五～四三五頁、同「藤樹学者淵岡山と其学派、岡山学派の研究（昭和一五年一月十二日報告）」（同『帝国学士院紀事』四（一）、一九四六年）四九～八一頁。

(30) 木村光徳『日本陽明学派の研究：藤樹学派の思想とその資料』（明徳出版社、一九八六年）。

(31) 小山国三、吉田公平編『中江藤樹心学派全集』（研文出版、二〇〇七年）。以下では、『藤樹心学派全集』と略す。

(32) 高橋恭寛「会津藤樹学派の展開と〈藤樹の教え〉」（東日本国際大学出版会『研究東洋：東日本国際大学東洋思想研究所・儒学文化研究所紀要』（七）、二〇一七年）三四～五三頁。

(33) 高橋恭寛「淵岡山における『藤樹学』の展開」（東日本国際大学出版会『研究東洋：東日本国際大学東洋思想研究所紀要』（八）、二〇一八年）七二～八八頁。

(34) 藤樹先生年譜に関して、諸伝本（岡田氏本・川田氏本・会津本）に異同があることは、先行研究によって指摘されている。本稿においても藤樹の伝記的な記述は上記した各伝本によるが、伝本の異同についてはかならずしも逐一、注記せずに、年譜と略称する。

(35) 『藤樹先生全集』第五冊・藤樹先生年譜、三六～三七頁。

(36) 『藤樹先生全集』第五冊・藤樹先生補伝、一五〇頁。

(37) 『藤樹先生全集』第五冊・藤夫子行状聞伝、一〇三頁。

(38) 『藤樹心学派全集』上巻・岡山先生示教録巻之五、一八七頁。

(39) 『藤樹心学派全集』上巻・岡山先生示教録巻之一、八頁。

(40) 『藤樹心学派全集』上巻・岡山先生示教録巻之三、一〇二頁。

(41) 『藤樹心学派全集』上巻・岡山先生示教録巻之三、九五頁。

(42) 藤田覚「讃辞によせて―『かがみ草』の由来―」（中江藤樹原著、日本総合教育研究会（関西外大教員養成研究会）編訳『現代語新訳『鑑草』（全）』行路社、一九九〇年）一四八～一五三頁。

(43) 喜多方の歩み編纂委員会編『会津喜多方の歩み：原始から明治へ』（喜多方の歩み編纂委員会、一九六六年）三三四頁。

(44) 内村鑑三『代表的日本人＝REPRESENTATIVE MEN OF JAPAN：英文

版』（ＩＢＣパブリッシング、二〇一五年）において、中江藤樹はA Village Teacher（筆者による和訳は村落教師）として挙げられている。

（45）『藤樹先生全集』第三冊・翁問答、一〇九頁。

（46）心学は陽明学に属するもの、朱子学に属するもの、そして梅岩によって開かれた石門心学と称するものと三種類あるという捉え方に関して、市川本太郎『日本儒学史（五）近世篇２（古学派・其他学派）』（汲古書院、一九九五年）において述べられている。

（47）石川謙『石門心学史の研究』（岩波書店、一九三八年）三三頁。

（48）肖琨「江戸期善書に関する研究」（立命館大学博士論文、二〇一一年）。

（49）八木清治「幕末思想家と熊沢蕃山ー幽谷・方谷・小楠の蕃山理解・受容をめぐってー」（日本思想史学会『日本思想史学』一七、一九八五年）四一～五一頁。

（50）相良亨『近世日本における儒教運動の譜系』（理想社、一九六五年）。